「歎異抄について」

お早うございます。ただ今ご紹介に預かりましたが、私はいわゆる専門家でもございません。研究ということも当たらないのでございまして、学問的に研究とかというようなことは、その道の専門家の方にお願いしなければならないのでございますが。私はただ一人の人として、いままでこの地上になんとか生命をつながせて来て戴いた。形から言えば、一応の世間並の学校教育を受けたというだけであって、それは、そのお陰でいままで世間を渡らせて来て戴いたのでその点は非常に有難いとは勿論思っているのでございますけれども、生きていること自体は別に学校を通って来たからとか、なにか特殊な勉強をしてからとかということとは全然、「全然」とハッキリ申したほうがサッパリして良いと思いますが。全然関係がないと、こう一応申し上げなければならないと思うのでございます。

そういう意味で本日は講義というようなことは、思いもよらない私の分ではございません。ただ一人の人間がいまここに生きているというその事実そのものを自分で反省すると申しましょうか。自分自身に訴えてみる。それだけのことなのでございまして、そう申すと甚だ失礼なのでございますけれども、ここにおいでになるのが、山の中のお爺さんであり、お婆さんである。もっと極端に申しますれば、皆さんのお顔が山の石に見えたり、山の木に見えたり、あるいは谷川の砂のように見えてもちっとも構わない、と申しては失礼ですが、構わない。私自身がその前で、独り言を申させてもらいたい。そういうことなのでございまして、研究とか講義というものと全く方向違いなことだということを、あらかじめお詫び申し上げたいと思うのでございます。

最初に一つ前提を出さなければ、どうも話の進め方が都合が悪いように思いますので。というのは今ここに立っておりますと、立っておるという姿はございますが、その姿だけでそこに、姿がそこに在るには違いないけれども、それだけかというと　そこで「それだけで」と言うと、そこに一つの分析が出て来る。

声に出し、知識で話をする以上はどうしても分析が避けられないのでございまして、まあ「それだけ」という具体的なものは、「それだけ」と言えば別なものが在ると、そういうように分析がそこに起こるわけでございますが、

事実そのものには、そのような「これ、あれ」というものはない筈なのでしょう。

言葉の上では一応「それだけ」という言葉を使わせてもらいますと、「それだけだ」と言ってはどうも進みようがない。事実はそれだけもこれだけもなしに、こういうようにとにかく動いているのですから。「動いている」と言うと、それでは動かない静かな所が在るかこういうようにまた分析が出て来るのですけれども。この生きている、ここに姿を現しているということが、どこか、何らかの意味で　　これは私だけの実感なのですから、皆さん方それぞれのいままでここまで生命を立派にもって来ておられる、各々の方々のボリュウムと言いますか、あるいはウエイトと言いますか、それぞれに応じての実感がおありなのでございますが。私は、この二・三年来体重四十キロ危なく切るか切らないかという、四十キロの線に立っているのでございますが。その四十キロの程度でしか、その実感が、実感と申しても、勿体ぶって実感などと言っても、実は四十キロの男は、四十キロの実感しか出ない。ということをご了承願ってのことですが。その四十キロの実感でこの自分の下のほうへ、引力がありますから下でしょうが、下のほうと申しますのは自分の体、その姿がそのまま四十キロのウエイトで、下に連なっている。あるいは下からそういうウエイトが、上の手の先から頭の先までズーッと満ちている。そういうもので私は生きている。そういうことを、一応つかみ所のない話のようですけれども前提しなければならない。つまり、姿が在るということは同時にその中に、その姿を現しているところの、つまり実体という言葉を使うとまたこれいろいろ概念的な間違いが出て来ると思うのでございますが。ウエイトの実感という言葉で逃げておきたいと思います。そのウエイトの実感というものがある。

そういうものが、私なら私にあるということは、あらゆる人がみなそれぞれそういう実感で生きている。生きているということはそういうことなのである。そうすると一人一人の実感の、そのウエイトの上下で言うと、下の方でどこか一つになっている、実感の出所と申しますか、そういうものを考えなければならない。近ごろ私よくどういう所から出た概念だか分かりませんが、「原点」と言う言葉がよく雑誌などに出て来ますね。これは何か、外国の言葉でしょうか、どなたかこの原点という術語の出所をご存じの方があれば、後ででも、座談のと

きにでもお教え願いたいと思うのですが。

この言葉を仮に、誤っているかも知れませんけれども、この字だけをとって申しますと、我々の生命の生きている原点というもの、そういう方向ではないかと思うのでございます。

別のほうから考えてみますと、人類が実際の時間的に見ていろいろな、無生物の世界から生物の世界に入り、生物の世界の各段階を通って、いつの時代だか分からないけれども、何十万年だか、何百万年だか分かりませんが、その昔にとにかく人間の世界に入って来た。今日から自分は人間になったのだというそれを人間としての出発点、人間としての原点とでも言ってもいいのでしょう。

人間としての生命の原点。あるいは人間としての自覚の朝、そういうものを一応考えてもよいと思うのですが。そういうものを考えてみると、そのときの人間の力というもの、つまり過去にいろいろな生物・無生物の世界をズーッと通って来て、どういう理由だか分かりませんが、とにかくある朝人間として立ち上がった。そのときの力はそれまでの生物・無生物のあらゆる自然の力以外のものではないのでしょう。それ自身は。

だけども同時に今日からは人間だという意味では、何かこう違った所があるはずなのでしょう。その朝の力を考えてみると、一日の朝でもそうですけれども非常に純粋だということは言えると思うのですね。純粋である、純である。つまり清い。その力が今まで、それから何百万年経ったのか知りませんが、現在まで、現在私らのいま生きているこの生命の中に、その純粋さが続いているのだと思う。また続いていなければならないだろう。

その純粋さに、純と言ってしまうと何かあまり無色透明なようにみえますが、少し色付けて見ればとにかくそれがいままで続いている、どこまでもその生命を続けさせなければならないという意味では、現在の我々の言葉で言えば、生命がいままでも無限の過去からズーッとその生命がつながれて来たということは、同時にそれがこれから先も無限にその生命がつながれていくだろう。こういうように思って良いだろうと思うのです。同時にその朝は、朝という言葉からすぐ連想することですが、明るい、闇が晴れた、なにか振り返ったその過去も無限に長い過去だったでしょうが、過去の闇から、闇が晴れて、明るい、世界中が隅から隅まで陰一つない世界中すっかり明るくなってしまった。

「光明」、その意味で光明と申しますか。光である、明

るい。その二つの生命が、生命が無量である。光明が隅から隅まで我々の生命の隅から隅まで明るく射してくれる力。そういう言わば二つの属性（attribute）が考えられると思うのです。

同時にこの二つのものを、別の気持ちから申しますと、この原点の朝の思いそのもの、ウエイトの中身というものは、なんとしてでも寿命をどこまでも続け、生命をどこまでも続け、しかもそれが暗い生命ではなしに明るい光りに満ちた世界でなければならない。そうならせたいものだという思い。これを「願い」と申します。生きるという願いですね。生きるという願いをその内容から言うと、どこまでもその生命が長く続くように、単に長く続だけでなしに、同時にそれが明るいものである。それを純粋な願いという。こういうものが、つまり原点の朝に立った人間自身は、そういう願いの下に立っているのだと、こう思いたい。

それは単なる神話であるか、あるいは単なる観念的な遊戯であるか、どうかということは、これは皆さんがたの生きておられる実感そのもので、そうであるかないかを確かめていく他はない。とこういうのがいわゆる「宗教」というものを認める限り前提にしなければならないのではないかと思うのです。

そういう根源的な願いが現在の我々の生命の本当の中身である。それが先程申しました、いまここに四十キロのウエイトならば四十キロのウエイトの中に盛られている実体だと、こう申したい。そういう願い、あるいは力に支えられている、それが現在の我々の地上の人としては、五十年ないし七十年あるいは、九十年、百年という一つの限られた姿の中身である。

いろいろ世界には宗教はたくさんあるようでございますが、どの宗教にもおそらくいろいろ形は違うでしょうけれども、中身を突き詰めて行けば何らかの意味で今申したようなものを、我々の生命の原点という地点において前提している。

ところが、そこでこの前提ということですが、客観的に前提をおくというならば、これは話は始末がいいのですが、自分の生命についての前提ということは、その前提を認めるか、認めないか。つまり置くとか、置かぬとか言っても、一面同時にそれは認めるか、認めないかということなのでしょうが。

そういう前提を置くか置かないかということを離れて、生命そのものが「ある」・「なし」ということになるので

すから、前提を置かないと言う立場で生きていくということは、それは自由である、その人の自由であるとそう簡単には言えない。少なくともそういうその人自身としては、そういう自分ではそういう前提なしに生きていくのだと、それは勿論自由でしょう。しかし、そういう前提のもとに生きている者からすれば、「いや、それはそういう生き方もございます」と言うことはこれは許されないと思う。許されないというより、それは不可能である。

つまり、我々が空気だけで、仮に絶対に空気だけで生きているとすれば、これから科学が発達して来れば、あるいは人間も空気以外のもので、たとえば月の世界にでも全部移住すると全然いま我々が考えている空気などというものとは違った何か　　と言ってもいまの知識の範囲でしか想像つきませんけれども、それでは話にならぬのですけれども、我々の想像を越えた別の何かで生きられるということでもあればこれは別ですけれど。現在の我々にとって、空気だけで生きているというのならば、そういう立場から言えば、いや俺は空気などなくても生きるのだと言う人に対して、いやそれは結構でしょう。そうしなさいとは言えない。そう言うことは出来ない。主観的にはその人は空気なしで生きていると言っているかも知れないけれども、それは認めてもいいけれども、「しかし、あなたは実際はやっぱり私らと同じ空気を吸って生きているのですよ」とそういう自分の前提をその人の後ろにもやはり、同じ前提をその人に持っていかざるをえないと思うのですね。

そういう前提が、宗教の前提であると仮にするならば、その意味で宗教の世界はある意味で非常に寛容ではなしに、非寛容な立場をとる。それがずっと現象的なところにくれば、自分の宗教を他に押し付ける。あるいは自分の宗教以外は人間ではないと排斥する、疎外してしまうというような現象も現象としては生ずるのも一応やむをえないところでございますね。

ローマ法王がいろいろの宗教を同じ立場で、少なくとも他の宗教も認めようという宣言を出したのはついここ十年前後位のことなのでしょう。今の世にそのようなことがあってと、思うのでございますけれども事実、歴史上の事実としては現在でもあるわけでございます。

同時にそれはローマ法王が、あるいはローマの宗教のカソリックの立場が人間の救済は認めるが他の動物の救済は関係がないのだというような考え方、ないしはカソ

リック以外のものは宗教ではないのだという考え方。これは結果としては排他的な態度にもなりましょうし、あるいは仏教の立場から言うならばそういう、それが仏教であるかどうか分からないけれども、今申したような前提に自分は立っておらないという人が仮にあるとするならば、そういう人をそれは人間ではないのだというように外に出すのではなしに、逆にそれこそ、そこに我々の共通な前提が本当に前提としての意味を表す場所なのだと。

だから「あなたも」、あるいは「他の宗教の人々も」同じ前提の中に入って貰いたい。他人ではない。それこそ本当に言わば自分自身の分身なのである。ただそれに気が付かないだけなのである。

同じ前提をあらゆる生きとし生きるものが、あるいは山川草木国土一切がことごとくその前提の中に包まれているのだ。それをお互いに知ろうではないかと、こういうような態度にもなり得ることなのだと思うのです。

それを仏教の方では、その前提を具体化したものを、「仏性」と極めておおざっぱな言葉を使って申し訳ないのですが、普通に言われる一番分かり易い我々が親しくなじんで来ている言葉で言えば「仏性」である。あらゆる生きとし生きるものの生命の奥には「仏性」がある。それならば今この姿は何か、仏性を表すための姿である。もう一歩すすめれば、いや仏性が表れているのだと。ここまで言わなければならないのではないかと思う。山川草木ことごとく仏性がある。

そこまではまず頷かれると思うのです。頷くことができると思うのですが、それから一歩踏み出して山川草木ことごとく仏性そのものの表れだと言うところへ出ようとするその境目に、仏性があるということとそれがこういう姿をもっている。こういう相をとって有限の現実の世界をつくりあげているという、その境目におそらく倫理・道徳という関所があるのではないかと思うのですが。そこは皆さん方のほうのご専門で十分にお考えになっておられることだと思うのでございますが。

そういうことを、ですからその仏性が現実の我々の姿の上にどういう意味で表れ、あるいは「表れ」というよりも、その表れはおそらく道徳の世界での表れなのでしょう。表れたものはことごとく道徳の世界としての表れなのでしょうが、その道徳の世界としての表れに、仏性が表れているのか。あるいれてなにか道徳の世界自身だけの、別の表れがあるのかどうか。その辺がお互いの

概念的には問題になる、またなっていることだろうと思うのですが。そちらのほうはよく分かりませんが。

その道徳の世界に対して、仮に宗教の世界という言葉を使わせてもらうならば、宗教の世界としては我々にはみな仏性がある。生物学的に、時間的に言って人類の生命の原点の朝に立ったそのときの生命の実体を仏性だと、その仏性は「願い」である。その願いは生命がどこまでも続けたり、それからどこまでも生命の内容が明るいものであって、明るいそういう内容をもった「願い」である。

そういう力が現実のこの私達の日常の朝から晩まで、夜昼その中でいろいろの喜怒哀楽、怨みもあれば、妬みもあり、悲しみもあれば悔しいこともある。そういう様々な現実の生命の気が付かないけれどもその現実の生命の隅から隅にまで、その生命と光の願いそのものが生きて働いているのだ。それによって我々が生き、働かされているのだ。

そういう願いの力によって、現実の私達がいま生きているのだということを、これはその意味ではいわゆる外に向かっての知識とは言えないでしょうね。だから知識とは言えないのだが、つまり概念的な知識ではない。それは何かと言われればそれは「信」だと言うような言葉で表すほかはないのでしょう。

「信心」とは何かと言えば、端的に言って仏性なのだと。いや、仏性を信ずることが「信」なのだと言いたいのですけれども、仏性を離れて、信心がある訳ではないのでしょう。そうすれば一つの知識になる。そうじゃなしに、仏性なのだとう、仏性を信ずるということ自体が仏性そのものを確かめている。つまり仏性は即信心なのである。信心を離れて仏性もなければ、仏性を離れて信心が別にあるわけではない。

これは、少し横にそれることですが、我々はよく「信仰を持っているか」という。「信仰を持っているか」と言うと、「信仰」と「持っている人」とが別になっている。持っている信仰ならばときに落すかもしれない。生命の次に大事な、ときには生命よりも大事な財布でも落とすことがあるのですから。持っている信仰ならばこれは落とすかもしれない、あるいはなくしてしまうこともある。あるいは若いときには持っていたけれども、四十才越したらそういうものは用がなくなった、などというような持ち方も俗にはありますね。ある時期には〇〇を信仰していたけれども、〇〇の宗教に入っていたけれどもいつ

の間にかそこを離れてしまった。今は別にそういうことは何も念頭にないというような人もある。案外そういうときに本当にその信心の中に入りかけているのかもしれない。

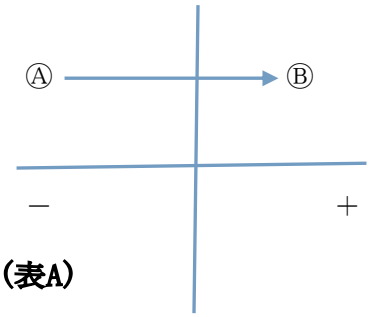
そういう意味で仏性は信心である。そうすると我々が生きているということ自体は一つの信心なのである、「信」なのである。

だから先程の四十キロなら四十キロの、六十キロなら六十キロの自分、その人その人のウエイトと申しましたが、そのウエイトの言わばその人の中にある真のウエイトであるとこういうように申したらどうでしょうか。そういうことを、それが私の申し上げたい前提なのでございますが。

それを受け取ってもらえるか貰えないかというだけのことなのであって、別に受け取らなければならないという義理もなにもあるわけではないのでございます。またこれが前提ですから、それが良いとか、悪いとか言ってみてもこれも仕様がないので、良いとか悪いとかいうこともその前提から流れて出て来ていることなのでしょうから。

たが、多分座標からきている言葉ではないかと、こういうお話でした。そうだと考えますと、ここは（表Ａ）はいわゆるゼロなのでしょうが、あらゆるものを生み出して行くゼロなのでしょうね。

この場合、生命の原点の朝というときには、過去の、無限の過去をマイナスという形で、こういう世界（表Ａの Ⓐ）を後ろにおんぶしている。そうして今日から人間としての、人間自覚の朝、自覚宣言の朝と申しまするか、それは自由平等愛、あるいは慈悲と申しますか。こういう全く解放された未来に向かって無限の生命を持ち過去の暗黒の世界（表Ａの Ⓐ）からすっかり解放された、明るい光りに充ちている未来（表Ａの Ⓑ）の前に立った。そういう意味ではないかと思うのですが。



（表A）

そこでこの世界（表Ａ Ⓑ）の内容はしかしながら、この世界（表Ａ Ⓐ）の内容をおいてあるはずはないのでしょうね。あらゆるいろいろなものがここ（表Ａ Ⓐ）にあったれが何らかの意味でここ（表Ａ Ⓑ）に来ている。これを抜きにし

てここの生命の内容はない。従ってここに弱肉強食があれば、ここにもやはり何らかの意味の弱肉強食がある。ここが限定された豚は豚、牛は牛、牛が豚になることも出来なければ、豚が魚になって泳ぐことも出来ない。それぞれ限定された存在、その限定が　そのままやはりここ（Ⓑ）にも、来ている。この世界（Ⓐ）では盲目的に善も悪も考えられない。この世界（Ⓑ）に入れば善悪が出て来る。従って道徳の世界はこれも極めておおざっぱな話ですが、何らかの意味でのこの世界（Ⓐ）の、言わば具体的な内容について言うと、この世界（Ⓑ）の規定なのでしょうね。

「ゾルレン」という言葉は、これは皆さんがたのご専門として、こちらから伺わなければならないのですが、「～すべし」というのはいささか、表からとるとゾルレンという言葉が、と言ったらおかしいかもしれないが舌触りの良い、舌滑りの良い言葉ですね、ゾルレンという言葉は。何かこう理想主義的な滑らかさがあってそれに乗って行くとツルッと理想が実現しそうであるかのような感じがする。私の悪い癖かもしれないが。

だけども「ゾルレン」というその滑りの一駒一駒は、何らかの意味の滑りのいい「～すべし」「～すべし」とスーッと行きそうだが。その一駒一駒に刺がある。ゾルレンの道はこういうような華やかなスーッとしたレールのような、登りには違いないがレールのようじゃあなしに刺がある。「ゾルレン」と思った瞬間にすぐにその刺に引っ掛かってしまうのですね、我々は。それで理想と現実はなどと言ってここで溜息をつかなければならない。というのは何かここの関係を表して居るように思う。その意味でこの世界（Ⓑ）は一応否定である。こちらの世界（Ⓐ）の何らかの意味の否定の世界。それならばしかもこのものがこの中で、だからと言ってこれをここ（Ⓑの世界）からみんな外へ放り出してしまったら全く空虚になってしまう。人生も世界も成り立たない。この世界（Ⓑ）の内容はあくまでもこの世界（Ⓐ）以外に何もない。とするならばしかもそれが否定されなければならない。つまり殺しておいて生かさなければならない。その意味では道徳の世界では善悪はあるけれども、その否定をもうひとつ否定する。否定の否定である。一応殺しておいた形で生かしていく。というのは本来生きていたものだ。仏性というものは先程申しましたように、無限の寿命、生きて居るということはそういうことなのだ。どんな、ここ（Ⓐ）はマイナスですね。一切のものは、こ

こ（Ⓐ）から来たものはみなマイナスという運命づけられたものでしょうが。いかなるマイナスのものもこの世界では、マイナスがもう一度プラスに。否定されたものが、その否定が更に否定され、否定の否定が宗教の世界だと言われるのはこういう形で表せば表せるのか、どうなのか。

「歎異抄」にも出ていますように、「善人なおもて往生をとぐ、いかにいわんや悪人をや」と。あるいは「煩悩即菩提」。煩悩の氷が多ければ多いほどそれがとけて菩提の水になる。氷だから駄目だと言ってしまったら、後は何もなくなってしまう。カラカラになってしまう。　どこまでも我々の人生の内容そのものは、水なのだ。ただしそれは氷という形の水なのだと。その氷が溶けさえすれば、なにも氷を捨てるという意味はない。そういうことを、そこで方向転換ですね。否定の否定という意味で普通我々の実感から言うならば、我々の生き方が毎日毎日、前向きの姿勢・前向きの姿勢と、前向き・前向き・前向きとみな行っている筈なのに、それが毎日交通事故を起こす。あれどのようなものでしょう、みな後ろ向きで運転してみたらどんなものだろう。

後ろ向きでやったらゴチャゴチャになってしまって尚更交通事故がひどくなるのかどうなのかちょっと分からぬが。ちょっとみな後ろ向きに運転してみたら案外交通事故が一割か二割減るのではないですかね。どんなものでしょう。つまり、前向きの姿勢に対してこれは後ろ向きの姿勢。原点に帰る。否定の否定ということは、こういうように進んで行くのをこっちへ行く。つまり原点へ行く。自由平等ということが、前向き前向きで行くものだから自由と自由とが衝突しあってさっぱり自由でなくなる。平等平等と言っていつの間だかそのその平等を唱える一つの階級制度が出来上がってしまう。もとの原点に帰る。そういうことは無理なたとえかも知れませんが、言えるのではないかとも思うのですが、そこのところは一ついろいろお教え戴きたいと思うのですが。

それでは、この岩波文庫の「歎異抄」の解題を読ませて戴きたいと思うのです。金子大栄先生は申し上げるまでもない方でございますが、いまもう九十才位の方ですね。まあちょうど京都にいたころ仏教青年会というのがありまして、そこの講師に月一回の会でございましたが、ズーッとお話しをお願いしたものでした。いまから四十年位前のことです。その意味で金子先生の本を読ませて戴くと言葉そのまま聞いているような感じがして懐か

しいのでございます。

皆さんがた十分ご承知でございますけれども、はじめの五ページ、「この書は親鸞聖人の語録を本とし、それによって親鸞の死後に現れた異説を歎きつつ、親鸞の正意を伝えようとしたものである」。こういう師匠と弟子との関係というもの、師匠の生命を弟子がそのまま自分の中に受けとって表している。どこまで親鸞のいのちがこれを書いた唯円のいのちにつながっているかということには、まあ実際問題としては人が違うのですから、かりに親鸞が百とすれば、唯円のいのちが八十まで入ったか、あるいは六十まで入ったか分からない。そこに現在「歎異抄」の誤りがこことここにあるというような説を出しているような人もある。

これはやはりその人、その人の生きる時点が違うのですから「私」・唯円自身としてはどこまでも親鸞のいのちの中にとどまり、そのいのちの中に入り、そのいのちの中にとどまってこれを書かれたものであるという前提がどこを読んでも、実感が湧いて来ますね。その意味でこれは非常に貴重なものである。貴重なものと言われている。単なる学説が伝わったという意味ではなしに、一人の人が生きたそのいのちが、次ぎの人にどのように、そのまま伝わっているか、どのように生かされて行っているかという、いのちのつながりを表した本であるという意味で、非常に特色のある本だと思われる。その意味で非常に有り難い本ですね。

唯円であるかどうかということは、歴史的には決定されてはおらないのだけれども多分間違いないだろうということのようです。親鸞聖人が亡くなられてから書かれたもののようですから、作者は二十年か三十年後の人のようですね。

それから七ページのおわりから五行目あたりのところ、「この書の第十四章に『一生のあいだ申すところの念仏は、みなことごとく如来大慈の恩を報じ、徳を謝すとおもうべきなり』とあるのと思いあわされて、直弟子間に共通な宗教感情の流れていたことが伺われる」　そういう共通な宗教感情の源であった自分の先生の親鸞聖人の「有り難さを思う心は『さればかたじけなくも、わが御身にひきかけて（親鸞聖人の自身のおん身にひきかけて）、われらが身の罪悪のふかきほどもしらず』」　つまり罪悪というものを、私もよく分かりませんが、おそらく我々の本来もっている仏性の自覚を邪魔しているところの、覆い隠しているところの煩悩、日常の我々の煩

悩を言うのだろうと思います。

自分の心を振り返ってみると仏性など出て来ない。出て来るものは朝から晩まであだ、こうだという煩悩だけが実は出て来ている。そいつが邪魔になる。それを取り除いて見れば。あるいはそれにとらわれなければ、という言葉を出す立場もあるかも知れませんね。煩悩なしでというのではない。煩悩にとらわれなければという。だが、あるのに「とらわれなければ」というのは無理なのである。じゃあ、もう一歩先に進んで見ると、煩悩だと思う心が、それが邪魔なのである。本来煩悩というものはないのだと知らされる。そういう言い方もされるようですね。煩悩があるのだ、それが邪魔するのだ。それを取りのけたら、仏性がでてくるのだと言ったらやっぱり相対的な押し合いになってしまう。あるものを取りのけるとそういうことは出来はしない。本来なかったのだと、本来ないのだと。

『われらが身の罪悪のふかきをもしらず、如来の御恩のたかきを』　「如来の御恩」というのは仏性そのものの力を実感すること。それによって我々は事実生かされている。分かったから生かされるのではない。分かっても分からなくても事実それによって生かされている。今現在ここに生かされているという事実そのものに気がつく。そうすればただ有り難いというほかは何もない。文句も何もない。理屈も何も要らない。生かされているという事実そのものに、ただ打たれる。その事実を知らないことが「迷う」ということですね。『まよえるを、おもいしらせんがためにてそうらいけり』。

八ページ。「この書は二部に分かれている。前半分と後ろ半分になっていて、前半分が親鸞聖人の直接の言葉そのままを書いてある。後半分がそれを根拠にして唯円自身がその時代の思想の混乱に対する批判を述べている。自分の批判を自分の頭で考えたもので批判する。批判の原理は弟子としての自分の頭から割り出したものではない。あくまでも自分の師匠の教えそのものを批判の原理としてそこに出している。親鸞聖人の言葉を、具体的に言えばこの前半ですね。前半を根拠にしてそれに基づいて現在自分の目の前に現れている異端邪説を批判していると、そういう形になっている。

この点実際そうだろうか。そうじゃなしにその批判の根拠になるものが親鸞聖人が別に書いたものがあるのではないだろうかと、こういう歴史的な考証もあるようですが。その考証がはっり成り立たないものですから、内

容から照らし合わせてみておそらくその前半そのものが根拠だと言っていいだろうということになっているようですね。

それから十ページ。そこで教義ですが、なにも難しいことでもなんでもないのだと。学問がなければ知識がなければ、非常な信仰心がなければとか、真面目でなければ分からない、そんな難しい条件づきではないのだということ。それでは何かというと、そこに出ていますように「本願を信じ、念仏をもうさば、仏になる。そのほかなにの学問が往生のようなるべきや」これは第十二章にでています。これが簡単明瞭に浄土真宗の本質を述べたものである。本願を信ずるというのは先に申しましたように、生命の原点の朝の我々の心の中に一杯になっている生きる、生きたい、生かさずにはおかない、必ず生きる、これが本願ですね。願い。生命の根本的な願いである。

ところがそれが全身、全心、全身全霊をあげての今日から人間としてスタートするのだという体も心も張り切っているし、体もその通り張り切っているそのときですから。その体の面を表して念仏と申している。「南無阿弥陀仏と」言う。

スタート・ラインに並んだ陸上選手の心を思うと、「ヨーイ　ドン！」というのは、あの「ドン！」は、おそらく外になるピストルだか、おそらく選手が自分自身の心の中から出す「サア！」という声なのでしょうね。自分の外に別にピストルの鳴るのを聞いていたのではおそらくスタートに間に合いますまい。外の声ではなしに、自分の内から出す、体から出すスタートの言葉が念仏である。願いのあるところ心の願いがそのまま体に現れて、念仏である。それがそのまま陸上の百メートルの選手ならば、百メートルという人生のコースをまっしぐらに走っている。それがそのまま仏の、いや仏に成っているのだ。

そこに確かに問題があるのかも知れませんね。いやスタートは分かるが、スタートがある以上決勝点があるのではないか。ゴールのラインがあるのではないか。ラインに入って初めて仏に成るのではなかろうか。時代的に言えば親鸞聖人の鎌倉時代以前の宗教には、両方の考え方があったようである。これはご承知のとおりこの世で願ってあの世で仏に成る。あの世を願う、平安朝時代は。同時に真言・天台のようにいやこの身このまま仏に成るのだという、即身成仏という立場も、立場などという

冷たい言葉を使うとですね。

我々日本人の祖先の優れた人が命懸けで生きた生き方に対して、いや、そういう立場もあるなどということを机の前で言っていること自体もう全く話にならない浅ましいということだと思うのですが。そこを許してもらうならば、来世に往生すると、仏に成れるということ百メートルのコースを終わってゴールに入ったときに仏に成るのだと、いや百メートルを命懸けで走っているそのとき自体がもう仏なのだという二つの考え方がある。

ここでは、その平安朝の仏教から鎌倉時代の仏教に入った意味の大きな違いと言いますか、深まり、進化というのでしょうか。あるいは実態そのものにはそのような区別はないのだけれども、みな同じ生き方、生き方そのものは同じ生き方なのだが、それをただ思想的に表した場合にそのような区別がつくのだというのでしょうか。あるいは我々の思想と、思想というものの性格がそういうつまり思想が発展するということは一体どういう意味をもつのか。現実に生きている実態とその実態が思想として表すものとの関係はどうなのかと、思想が発達するということは実態そのものの内容も発達するということなのか。そのへんがどうも難しいことなのだと思うのですが。

それならば鎌倉時代の仏教が平安朝時代より一歩でも深まったと、仮にそういう言葉を使わせてもらうならば、それはどこだろう。少なくとも親鸞聖人も、道元禅師もそうではないかと思うのですが。端的に言えばこうだと、言われている。言われてというのは私自身もそうだと言う力も何も無いものですから、言われているとしか他に言いようがなのですが。この世で仏になるのだ、いや、ゴールに入ってはじめて仏になるのだ。いや、走っている間にすでに仏になるのだ。つまりこの世で悟りをひらくか、死んだときに悟りはひらかれるのか。悟りは生きているときにひらくのか。死んだときにはじめて悟りをひらくのか。という問題にどちらということ自体がそれが迷いなのだ、と。

「生死」ということが本来ないのだと、生死というそういう分け方は、方便なのである。この生死を否定、この否定ですね。というのは悟りは生死に対する否定ですね。現実に対する否定が悟りである。そういう悟りそのものを否定するのだと、否定の否定。否定の否定であるからそれを「無」という言葉で表すしか仕様がない。何もないというのではない。何もかも、まったく虚無とい

うのではないのですね。否定の否定なのだから。

生死という方便に我々が欺かれている。それが迷いなのである。生死そのものがないのだということが悟りならば真の真実ならば、方便に対して真実、それが仏になる「生（しょう）」このように考えられるようですね。それならばすぐ問題が出る。じゃあこの方便をどのようにして捨てるか。方便を捨てればいい、しかし捨てられれば初めから問題はない。方便を捨てるということに我々はまた引っ掛かってしまう。そうじゃなしに方便を捨てる、方便を捨てようとすれば、余計に方便に引っ掛かってしまう。方便にさらに方便を付け加える。そうじゃなしに方便を捨てるということは真実に生きればいいのだ。そうすれば方便はなくなってしまう。

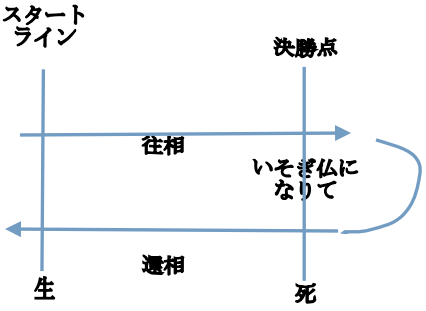
つまり屋根に上るのに梯子がある。梯子に上る。梯子そのものに一生懸命喰らいついていれば、いくら経っても屋根へ上れない。それから大事なことは梯子に上りながら、いくら梯子をはずそうとしても、はずせないですね。まあ、はずせば「ニヒル」という梯子と共に落ちてしまわなければならない。そうじゃあなく、梯子は方便なのだからとらわれないで、そのまま上って行ったらいい。上って、屋根に上らせることに問題があるのであって、方便をなくするとか、なくしないとかに梯子の意味があるのではない。だから方便に有り難いと言って屋根に上ってしまえば、梯子があろうがなかろうが何もかまわない。あっても邪魔にならない。なくても差し支えない。それが真実なのである。

「真実に生きよ」　じゃあ、真実に生きるというこ　とは何かというと、一番初めの「本願を信じ、念仏申　す」スタート・ラインで言うならば人生百年の（人生五十年と言いたいが、私自身五十年を通ってしまったので、それなら七十年と言うと私今七十だから、七十と言いたくない、せめて百年と言いたいのですね。仮に百になったらおそらく人生百二十年と言うだろうと思うのですたらおそらく人生百二十年と言うだろうと思うのですが）人生百年のスタートについて、ヨーイ・ドンという合図を待っている選手の気持ちになってみれば、その力一杯百メートルを乗り切ってやろう、周囲の人が何位であろうとそういうことは問うことではない。とにかく自分はこのコースを乗り切るのだ、全力をかけて乗り切るのだという思い一つに、自分の中からヨーイ・ドンという声を、自分自ら出して、願いそのものが突っ走って行くのですから、誰かが合図したから走ってやろうという

のではない。願いそのものが「いのち」として、それが真実。真実そのものがスタートをきる。

それなら途中は、スタート・ラインはそれでいいが、途中もここのスタートの朝の心をそのまま体そのままがここに時間的にここにいる。そうでなければならないでしょうね。ここ（スタート・ライン）だけは真剣だったが、走っているうちに応援団がどうしているか、こうしているか。隣のものが俺より後か先か、そんなことでは足元が乱れてしまう。

このスタート・ラインと同じく、つまりこの原点の朝（表B参照）そのままに、コース途中の、ここも原点、ここも原点、一足一足そのものを原点として生きている。ここから出発点を考え、決勝点を考えるものだからここは「生」であって、ここが「死」である。生と死という区別はこれに囚われてしまう。そうではないのだ、一足一足がこれがことごとく生死・生死・生死・・・なのである。そうすればもはや生きている時は悟れない。死んでから悟るのだ。いや、生きている時が悟っているのだ。それはことごとくが方便である。真実に生きれば屋根へ上ってしまえば、屋根へ上ることが先決問題。梯子に上りながらこの梯子どうしたらいいだろう。この梯子どうして捨てたらいいだろう、と。自分が上りながらその方便を捨てることはそれは出来ない。



表B

一刻一刻が生死・生死・生死・・・・である。そうすれば悟りということはその意味では問題にならない。こういうようにも考えられる。　ただし、この歎異抄自身の表現から申しますと何らかの意味でやはり決勝点に着いて悟るのだと、ここからこちらの世界が、この世界こういう　な書き方である。それが親鸞聖人の本心であったかどうかということは、読む我々のほうの問題だと言わなければならない。というのは親鸞聖人が別の書かれた

ものではそうでないように、つまりいま言った、刻々に「生死」だという意味が特に親鸞聖人の晩年ですね、八十才以上になってからのものにそれがはっきり出ている。そういうように出ていると言っても、出ていると解釈するのですが、いま我々のほうで。それ以上は親鸞聖人ご自身にお伺いしなければならない。そういうように言われている。

この解説そのものは、そこのところはっきりとはどちらとは別に書いていないようです。表面的に素直に読めば、やはり決勝点に着いてから悟るのだというように、歎異抄の本文に即した解説ですからそのようになっているようですね。金子大栄先生自身もその点いろいろ長い間のご研究の途中、いろいろなお考えが出ていて、ある時代には、浄土論、浄土の問題で本願寺から異端として出されたこともある。

ついでに申しますと、それならば、ここのヨーイ・ドンという言葉を自分自らの内側から出して、自分のいのちの叫びとして出して、そして走っているこの念々の走り方そのものを体に表せば念仏である。「南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏」である。南無阿弥陀仏の五十年である。南無阿弥陀仏の百年なのである。決勝点に到達して、仮にここで悟るのだとすれば、悟った時はコースを終わってしまっているのだから、これを百メートルの選手だと言っていいのかどうか。コースの中にいればこそ百メートルの選手だけれども、決勝点の外へ出てしまったら百メートルの選手、いままでは選手だったけれども、もう選手だとは言えないですね。そこに問題がある。

そこで浄土に入るのだけれども、浄土に入ったのだけれども浄土に留まっておらない。これは論理的には確かに矛盾なのである。しかし宗教の論理は否定の否定というように、どっかに必ず矛盾が出てくる。それでどうかと言うと、これからこう進んで行くのを往く相（すがた）と言っている。ここに行って決勝点で腰を下ろしてしまえば、いままでは百メートルの選手だったかもしれないが、腰を下ろした途端に運動選手ではなくなってしまう。

それでは最初に無限のいのちに生きようとした願いの意味がなくなりはしないか。願いが満たされた途端にそれが願いである限りそれがまた新しい願いでなければならないですね。ではその願いは今度はどうなるかと言うと、これから向こうに行くということはこれはない。それは必要はない。言い換えればここまで来たものは今度はさらに進むとすれば、こう行くより仕様がない、

これを還相と言っている。還える相（すがた）ですね。これからこの人生を向こうに行き着いて、やれやれと腰を下ろしてそこで寝てしまうというのではなしに、確かにそういう気持ちも出る。まあ皆さんがたはお若い方が多いから、申し上げかねますがそうとうご年配の方からしてみればいままでいっそ死んでしまおうかと、自殺してしまおうかとというようなお気持ちもおそらく一度や二度はみなおありではないかと思いますが、あるいはこれからもおありになるかとこう思うのですが、それは願いそのものからはずれる。

永遠に自分を生かしていこうという根本の願いそのものから、自分が気が弱くなってですか、自分の願いそのものから自分が外れると死んでしまおうか、つまりこの途中で「ああ、もう疲れたこんな走っているのは馬鹿らしい」と外へ出てしまう。そういう気持ちも起こるかもしれない。

しかし、しかもその願いは自分自身が願われているのである。その願に生かされているのだということが分かれば、どんなに苦しくても悲しくてもここまではともかく　「ともかく」と言っては申し訳ない、生かされているということに力づけられて、その念仏が「喜びの念仏」　それは一面から言えば必死になって歯を食いしばって走っている選手の気持ちはそれは確かに苦しいでしょうね。登山も同じことで登山の好きな人の話を聞いてみても、やっぱりもう二度と登山したくないと思うなどと言っている。そう言っていて帰って来ると、又シーズンになると登山する。この苦しみを支えているものは何か。苦しみそのものを包んだ大きな喜びの心なのである。ああ楽しい、ああ面白いなどというそういう気持ちで山に登れる筈がない。

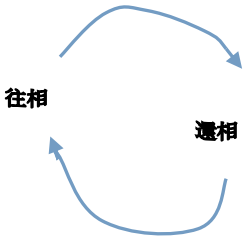
それは苦しいのである。しかしその苦しみを包んでいるもの、苦しみを苦しみのまま生かして行くもの。苦しみそのものが、そのものを生かしていくものそれが慶喜心、喜びの心。苦しみそのものが慶喜心の中身になっていると言いますか、苦しみがあればこそ喜びもあるのだと仮に言えるならば、苦しみこそ一つの原理でしょうね。それがあのお釈迦さんが成道のとき悟られた諦ですね。四諦のうちの一番最初は「苦諦」。「諦」というのは真理ということでしょう。「苦」ということも一つの真理なのである。この我々の現実において苦しみということはなければいいのだと思うが、お釈迦さんの悟りの内容をみると苦ということは一つの真理なのである。人生

を支えている四つの柱ですね。人生を具体的に支えている四本柱の一つが苦なのである。それで一番最初に苦諦と、苦・集・滅・道でしたかね。

そこでもういちどこっちへ還えるということは、言わば苦の世界に帰って行く訳である。苦の世界に帰って行くということは一度死んでから還えっていくのである。この世では親兄弟の病気一つ我々はただ傍観するより仕方がない。自分の子供に少し足の不自由な子供が出た。親としては何とかして治したい。出来ることなら自分の生命に換えてでも子供の足の不自由を代わってやりたいと思っても残念ながらそれが出来ない。生きているうちにはいくら助けようと思っても、黙ってみているより仕様がない。みすみす迷って行く子供を目の前に見ていても、引き留めようもない、救いようもない。

ただし一度あの世に行ってから再び帰って来て、百メートルをズーッと通って来てからその力で自由に、後から来る選手のコーチをしてやれるのだと。決勝点を通ってからという考え方でこの歎異抄には書かれていますね。「いそぎ仏になりて」と、はやく急いでこのコースを突破してしまって、仏になってからさらに自分の親しいものから救ってやれる、とそういう書き方ですが、それをいま申しましたように、一瞬一瞬がことごとくそこに生死があるのだと言うならば、我々は一瞬一瞬に往相・還相・往相・還相を繰り返しているのだと。その往相・還相を繰り返している心の中は喜びなのである。喜びの心が我々の往相・還相を支えている。喜びの心でこの具体的な人生の経営に当たっていくのだ。

極めて荒っぽい話でございますが、一応その辺で、途中でございますが打ち切らせてもらいます。



岩手県高校社会科教育研究会
盛岡市・教育センター
昭和四十四年十一月五日